
恋愛短編集

プリアメテス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛短編集

【Nコード】

N2090I

【作者名】

プリアメテス

【あらすじ】

恋愛短編集。お題を素敵サイト様に頂いて、それに合わせて執筆中。自分で考えたお題も有。メテオの息抜き小説のため更新不定期。基本一話につき1P。リクエストがあったらどうぞ！

01＊負けないくらい想ってるのに（前書き）

お題先『確かに恋だった』

01*負けないくらい想ってるのに

君はどうして私の想いに気付いてはくれないのだろう。
私の親友の気持ちはすぐに気付いてあげたのに。

「ねえ、何むくれてるのさ？」

「……アンタには関係ないでしょ」

そんなの嘘。

全てアンタのせいなんだから。

こんなにもむくれてるのも。

こんなにも胸が痛むのも。

「そうかもだけどさー。今俺すっげー幸せだからさ」

「……だから何？私に幸せを分けてくれんの？」

「うん」

迷いもなく頷くコイツを見て、私はなんて馬鹿な男に惚れたんだろう
うと思った。

私の気持ちにこれっぽちも気付かない私の親友の恋人。

ねえ、私を見てよ。

私を幸せにしたいならちゃんと気付いてよ。

「……まあ、無理だろうけどね……」

「……何か言った？」

「……アンタには関係ないことよ」

せめて私の目に入る場所に居て。

親友の恋人にそう願うのは罪ですか？

負けなくらい
想ってるのに

（アンタなんて不幸になっちゃえばいいのに）

（な、なんてことを言うんだ、君は！）

（もし私のせいで不幸になったら私が責任とってアンタのことを幸せにしてあげるわ）

02* もう僕の出る幕はない(前書き)

お題先 『確かに恋だった』

02* もう僕の出る幕はない

一年以上も彼女を見ていたんだ。
だからこそ、僕は…

「相談があるの」

「…相談？」

「相談っていうか、お願い…かな」

「何？」

「告白するの協力して欲しいの」

やっぱりと思った。

彼女が僕と仲良くしたかったのは、この為だって最初から知ってたから。利用されるのは構わない。

利用されているのだとしても彼女の傍にいたかったんだ。

「…いいよ」

「えっ、本当!？」

君の笑顔が眩しい。

最初から知っていた。

君はアイツしか見てないってこと。

アイツは君にひかれていていること。

君が告白するならきつと上手くいくだろう。

アイツは良い奴だ。

そんなこと昔から知ってる。

でも今無性にアイツを殴り飛ばしたい気持ちになったって許されるだろう？

もう僕は彼女の傍にはいられないのだから。

もう僕の出る幕はない

（本当にありがとうっ、大好きっ！）

（……っ、！それを伝えるのは僕じゃないでしょ？）

（でも言っておきたかったんだもん）

（…君は本当、子悪魔だよね…憎めないけど）

03*好きだったよ誰より(前書き)

お題先『確かに恋だった』

03＊好きだったよ誰より

今日は結婚式。

自分の…では勿論なくて、愛しいあの子の。

彼女の隣は何故自分じゃないのだろうと苦しんだこともあるけど、今日の世界中の誰よりも幸せそうな彼女を見て、自分の選択は間違ってたなかったんだと少し、ホッとした。

彼女を好きだと自覚した時、彼女を幸せに出来るのは自分だけだと思った。

でもそれはただの思い上がりで。

自分以外の男を選んだ時は悲しみと共に少しの怒りを感じたけど、でもそれは彼女が正しい選択をしたまでで。

おとなしく身を引くよ、なんて格好良いことも言っただけど、本当は全然納得してなかった幼い自分。

やっと今日、そんな自分とお別れ出来るような気がするんだ。

「おめでとっ」

——心からの“おめでとっ”やっと言えたよ。

「ありがとうっ！」

輝く笑顔の君。

今までずっと言えなかった言葉、今なら言えそうな気がする。認めたくなくて。彼女を諦めたくなくて。

「…ずっと好きだったよ」

ボソッと彼女には聞こえないように。

「…えっ？何か言った？」
「うっん、独り言」

聞こえなくていいんだ。今までずっと君を諦められなかった惨めな自分に気付いてほしくないから。

彼女を目で追い掛けるようになってもう何年たつかな。

彼女の周りはいつもキラキラしてて、すぐに彼女がいるんだと気付いてた。

そんな彼女を目で追い掛けてた自分はもういない。

だって彼女があまりにも幸せそうだから。

彼女が幸せなら自分も幸せ。心からそう思えるようになったから。

——ずっと好きだった。

やっとこの恋を過去にすることが出来たよ。
今までありがとう。

僕は今、新しい道へと一歩を踏み出す。

好きだったよ誰より

（彼とお幸せにね）

（うん。そっちもね！）

（君以上な人なんて見つかりそうもないけど）

（ふふっ、貴方だったらきつと見つかるよ）

04*この溢れる想いどうすれば良い？（前書き）

お題先なし。タイトル後付け。

半年以上前に書い

たものだと思われる。携帯に残っていたのでほぼ手を加えず投稿。

因みにこの話は長編になるはずだった。女の子視点の話も微妙に書いてあったが、投稿出来る程ではなかったなので断念。

04*この溢れる想いどうすれば良い？

一目惚れだったんだ。

初めてお前を見つけたのは高校の入学説明会の時。熱心に説明を聞くお前が一番輝いて見えた。

どうしても俺のいるこの高校に入って欲しくて。どうしても一度会いたくて。俺は今まで以上に丁寧に学校の説明をしたんだ。でも本当に俺の高校に来てくれるなんて全く考えてなかったのに。

「先生！荻原先生っ！」

名前を呼ばれて後ろを向くと、

「ああ、すみません。考え事をしていたもので。何でしょうか、蓮見先生」

蓮見楓が立っていた。

蓮見楓はなんだか俺に気があるらしく何かと話し掛けてくる。それなりに美人でモテるといいうが俺は全く興味なし。

「これ、今年の先生の受け持つクラスの名簿と書類です」

「ありがとうございます」

俺はそう言って蓮見楓から名簿と書類を受け取った。

「わたし用事があるのでこれで失礼しますね」

「はい」

大量の書類の中から中学から送られてきた顔写真入りの内申書を取

り出す。

それを無関心にペラペラと捲っていた。

別に俺はクラスの生徒がどんな奴だなんて興味はない。でも仕事だから一回はめんどくさくても目を通しておかなきゃいけない。

そんな風に思ってた。

思ってたのに……

「——っ！」

……お前を見つけた。

“叶深雪”そう書かれている内申書には入学説明会で見つけたあの子の顔写真が載っている。

運命やら神様やらいるわけがない空虚な妄想にその日ばかりは感謝した。

一年の初登校日。

どれだけ俺がこの日を待ち望んでたかお前は知らないだろう。

顔を会わせた時、俺が珍しく緊張してたことだって知らないだろう？

お前と初めて話せた時、俺がどれだけ嬉しかったかお前は知るわけない。無理やり仕事を手伝わせて、それでも俺に笑顔を向けてくれるお前が本当に好きなんだと俺は確信した。

無理矢理キス。お前を傷つけることは分かっていたけど止められなかった。

俺のことを先生なんて見てほしくなくて。

俺のことだけを考えて欲しくて。

お前は15。俺は27。12も下の子を好きになった俺ってやっぱりロリコンって呼ばれるやつなんだろうか？

なんて本気で考え始めてる俺は正直ヤバイ。
でも、それくらいお前が好きなんだよ。
どうしようもないくらい好きなんだ。

なあ、今少しくらい俺のこと考えてくれてる？
先生と生徒なんて、年齢なんて関係ないんだよ。
俺はお前に。俺は深雪に歩み寄りたいたんだ。

この溢れる想い
どうすれば良い？

（ほら、この荷物持つの手伝え）
（えー！何でいつも私なんですか！）
（お前が俺の視界に丁度いるからだ）
（何ですか、ソレ！）

05*魅せられて。(前書き)

お題先なし。

ヴァンパイアもの。

05＊魅せられて。

ヴァンパイア。

——それは妖しくも美しい生き物。

人間の血を糧とし、人を虜にし、人形とかせる。

そんなヴァンパイアに魅せられた人間がここにも一人。

「セレア、何をしている？」

黒髪紅瞳の青年は声を発した。

その瞳は血のように淀み、それ以上に輝きを放つ。

この瞳に私は囚われてしまった。そのことに後悔などあるはずもない。

「庭を…庭を眺めていたのです」

「そうか。そんなにこの庭を気に入っているなら、お前に与えよう。好きにするが良い」

ただ貪欲に血を求める時とは違い、今の彼の瞳には優しさも混じり、一層私を惹き付けて離さない。

「……いえ。この庭はこのままで」

「不満だったか？」

「その逆です。私にはこの美しい庭は勿体ないですから」

そう。この美しい庭は、この屋敷の主、貴方様にしか似合わない。私はただの餌。

そんな私を優しく傍に置いて下さってる事すら、勿体ないと思ってしまうのに。

「……レイティア様」

「レイで良いと言っているだろう」

「……何故、私を傍に置いて下さっているのですか？」

私は妖しくも美しいヴァンパイアに魅せられた人間の内の一人。ヴァンパイアは人間の血の最後の一滴まで吸い尽くすという。

何故、私は血を吸われながらも生きている？

——否。既に答えは出ている。

私を虜にしたこの美しきヴァンパイアが私を生かしているのだ。

「そんなこと、分かり切っていることだろう？」

幻想的な月に照らされて、ヴァンパイアは妖艶に微笑む。

そして、私を強く抱き締めた。

私が彼の胸に顔を埋めると、彼は私の肩に頭を預ける。

それは正に仲睦まじい恋人の姿。

「……セレア、お前を愛しているからだ」

魅せられて。

（私は人間、ですよ？）

（知っている）

（私でもいいんですか…？）

（お前でなければ意味がない）

06*君のこと目で追わなくなった(前書き)

お題先『確かに恋だった』

06＊君のこと目で追わなくなった

高校生になって、君に出会ってからずっと、私の目線の先には君がいた。

目が合うといつも君の方から声かけてくれたよね。

私と君はクラスも違ったし、殆んど接点もなかったのに。

でもいつしか君には『彼女』と呼ばれる人が出来て、その『彼女』と笑い合ってる姿を多く見かけるようになった。

その姿を見るのが辛くて。

私はいつの間にか君を目で追い掛ける事を止めてたんだ。

無意識に見つけていた君が私の目に入らなくなった。

元々大して接点もなかったから、彼と会う機会なんてもちろんなくて。

このまま私の恋は自然に消滅していくんだろうって思ってた。

「……あ、久しぶりだね」

突然声をかけられて驚いた。

声の主は、懐かしいと今では思ってしまう彼。

「……久しぶり」

「元気だった？っていうか、何かホント久しぶりだよな。今まで何で目が合うこと多かったのに。最近全く無いからさあ、どうしてるかって思ってたんだ」

……今まで目が合ってたのは私が貴方をいつも見つめていたからですよ、なんて言えないけど。

「元気だったよ。そっちはまだ『彼女』とラブラブ？」

辛くなかった。

今まではこうやって冷やかすだけでも辛かったのに。死にたくなる程胸が痛んでいたはずなのに。
そういえば彼の声にドキドキしなくなってる。

……ああ、私はもう……。

「んー…あの子とは別れたよ」

「……え？」

「他に好きな子出来ちゃってね」

そうなんだ、としか思わなかった。

前の自分だったら、その相手が自分だったら良いと、淡い期待に胸を躍らせていたはずなのに。

今は何も感じない。

ただ、その彼女と幸せになってくれたら良いなって何処か他人事で見てる自分がいた。

私の目に彼は映らなくなった。

それは恋の終わりの、合図。

彼のことを気にもかけなくなるまでのカウントダウンが確かに聞こえた。

恋の完全終了まであと——……

君のこと

目で追わなくなった

(ずっと好きだった貴方の)

(新しい好きな人が、)

(貴方の幸せを)

(運んでくれるといいな)

07* いまでもあなたが好きです（前書き）

お題先『確かに恋だった』
それ知らない彼女。

余命数か月の彼と

07*いまでもあなたが好きです

好きだった、なんて過去形に出来る程この恋は浅くなかった。
初めて会った時から君を想わない日は無い程君に溺れている自分がいた。

でも今日、俺は君に別れを告げる。
辛い。苦しい。傍にいてほしい。
そう願ってしまうけど、それを口に出すことなどしてはいけない。

「……俺達別れよう」

「……っ、！なっ、何でっ！？」
「君のこと、もう愛せなくなった」

半分嘘で半分本当。

君のこと今でも愛してる。きつと最期の瞬間まで俺の胸の中には君がいる。

——だから嘘。

君のことをもう幸せにしてあげられない。もうこの手で君を愛せない。
い。

——だから本当。

君は俺の言葉に含まれている意味に気付いたかな。
そのまま言葉通りに『君を好きじゃなくなった』ってとってくれるかな。

「……わ、私のこと…嫌いに、なったの…？」

彼女の頬に綺麗な涙が伝っていく。

彼女を泣かせたくはない。

彼女の涙は胸が痛い。それが自分のせいであればある程。

「嫌いになった訳じゃない」

ごめんね。はつきりと言えなくて。

嘘でも君を好きじゃなくなったなんて言いたくはないんだ。

「……私、の何、が悪かった…のっ？」

「君に非はない」

悪いのは俺。

君を一人残して逝ってしまう俺だから。

だから、俺なんかを想って泣かないで。

「今までありがとう」

これが最期の挨拶。

もう君に会うことなんて無いから、もう一言だけ続けさせてほしい。

「君に出会って、君の隣に居れて

——幸せだった」

最期だけ、隠していない自分の言葉。俺の本心。

彼女がまだ何か言いたそうにしていたけど、気付かない振りをして

きびすを返した。

もう彼女の傍には居られない。

これ以上泣いてる彼女の傍に居たら、彼女の温もりを求めて彼女を壊してしまう。

そして、傍に居てくれと願ってしまうだろう。

彼女もきつと傍に居てくれる。だって、彼女は優しい人だから。

だけど、その結果傷付くのは彼女。涙を流すのは彼女。

だって彼女は泣き虫で寂しがり屋だから。

そんな彼女の姿を見るのは何よりも辛い。

だからどうか忘れて。

俺のことなんて記憶の隅にも残しておかないで。

いまでも

あなたが好きです

（願わくば、）

（彼女が）

（俺以外の人の隣で）

（幸せになつてくれますように）

08*回り道をしたせいでもう手が届かない(前書き)

お題先なし。

『君のこと目で追わなくなった』彼視点。

08＊回り道をしたせいでもう手が届かない

ふとした時に目が合う。

そんな僕らはよく廊下で、その度に喋ってた。

僕が声をかけると彼女は笑う。

それがいつの間にか僕の日常になっていた。

クラスの女子の一人に告白されて何となく付き合い始めた。
それが全てのきっかけで。

僕の日常は少しずつ壊れていったんだ。

――視線が合わなくなった。

――彼女が僕に対してよそよそしくなった。

何故、と僕は思っていた。

……僕はきつと重要な選択を間違えてしまったんだ。

彼女との日常が日常でなくなった頃、やっと気付いたのは彼女への
気持ち。

よく目が合っていたのは、僕が目でいつも追い掛けていたから。

その日常が壊れてしまったのは、その日常が当たり前のことで、彼
女は僕にいつも笑ってくれると過信していたから。

愚かなのは、自分の気持ちにさえ気付かなかった、自分。

そんな僕から離れてしまったのは当然。

でも、また隣で笑っていて欲しいと思う。

一度は壊れてしまった日常を取り戻したいと願ってしまっ

僕は自分が気付かなかっただけで、彼女が最初から好きだったんだ。いつも優しく微笑んでくれた彼女が。

ねえ…もう一度あの澄んだ鈴のような声が聞かせて。

ある時、ふと見つけた君の姿。

それは遠く、後ろ姿ではあったけれど、彼女だと断言する事が僕には出来た。

直ぐ様走り寄って、声をかける。

「……あ、久しぶり」

偶然を装う僕。何だかかなりカッコ悪い。

でも、それでも、彼女の声が無性に聞きたくて。

彼女の瞳に僕を映してほしくて。

「……久しぶり」

懐かしい愛しい彼女の、声。

笑顔に向けてはくれたけど、それは何だか前に向けられていた笑顔とはどこが違う。

そう、無邪気さが足りないんだ。

今まで彼女は純粋に笑い時だけ笑ってた。だからその笑顔は透き通ってて、綺麗で。他人なんていう壁なんか微塵も感じさせなかった。でも今向けられている笑顔は違う。誰にでも向ける余所行きの笑顔。僕はそんな笑顔を見たかったわけじゃない…。

そんな風に思つて、気付く。

彼女は僕を『特別』に思ってくれていたのではないか？

それが恋愛感情ではなくとも、僕と同じように、あの日常が恋しいと思ってくれていたのではないか？、と。

都合の良い解釈だと笑われても良い。

確かに僕達には、他の人とは違う、もっと別の絆があったのだ。

もう僕を『特別』と見てくれてないと分かっている。

やっと気付いたこの気持ちを捨ててしまえばいい。

「そっちはまだまだ『彼女』とラブラブ？」

……君は知らないんだね。その子とはもう随分前に別れてるんだけど、な。

『特別』視しなくなった僕のことなんて、もうどうでも良いと言われている様で心が痛んだ。

君が僕の『彼女』に遠慮なんかして遠ざかっていったのは気付いてた。

だから、僕に『彼女』なんていなかったら、君は僕の隣で又笑ってくれるかな、ってちょっと思ってたのに。

『好きな人と上手く行くと良いね。あつ、私も帰らないとじゃあねっ』なんて直ぐに僕に背を向け去っていく君。

好きな人は君、なのに。

また、君は僕の見えないところに行ってしまふの？

——僕の隣はいつもぽっかりと空いてしまっている。
……君を好きだと気付いてから。

回り道をしたせいで
もう手が届かない

（この穴を埋めるのは）
（きっと）
（彼女しかないのに）

09*この想いを封印するよ(前書き)

お題先『確かに恋だった』

09*この想いを封印するよ

「——好き、です」

今日も又告白されている彼。

「ごめん。まだ、付き合うつとか考えらんないんだ」

いつも同じ台詞で、告白してくる彼女達をふる。

そんな彼は私の幼なじみ。

顔良し性格良し頭良しの三拍子揃った完璧な人。

私の小さい頃からの好きな人で、きっと彼以上に好きになれる人なんて一生出来ない。

これは思い上がりかもしれないけど、私には特別に優しくしてくれる彼。

……それは『幼なじみ』だから？

聞きたくても、聞けない言葉。

私が告白したら…貴方は何と言うの？『付き合うつとか考えらんない』って他の子と同じように私をふるのかな？

……ある時、彼の友達から告白された。

付き合うつつもりなんかなかった。でも、彼の反応を見たくて。

「……君から告白されたんだけど、返事どうしようかって迷ってるんだよねー」

嘘。だってちゃんと今日の放課後断るつもりだもん。

いくら貴方の友達が格好良いつて言われてる人だとしても、私は……
貴方しか見えないのに。見たくないのに。

「……ふん」

「……それだけ？」

「いいんじゃない？好きにしたら良いよ」

珍しく彼は素っ気ない。

私は貴方が好きなのに。

私が他の人と付き合っても良いと言うの？私はそれだけの存在なの？

そう思ったらつい口が滑ってた。

「私、小さい時から貴方のこと好きだったんだ」

つい過去形で言ってしまったけど、本当は今でも好き。大好き。

彼は私の言葉に目を見開いて……何か堪えるような表情をする。

私にはその意味が読み取れなくて。

「……そうだったんだ。サンキューな」

その言葉通りに取るしかなかった。

私の頭にぼんつと手を置く貴方。

——『ありがとう』なんて言葉が欲しいんじゃないの。

好きだと言って。私のこと好きだと言ってよ。

『アイツならきつとお前を幸せにしてくれるだろうさ』なんて言葉、聞きたくない。

私は適当に返事をして、その場から逃げ出した。

とめどなく溢れる涙を感じながらも、私はその涙を止めるすべを知らなかった。

この想いを封印するよ

（貴方の隣にいるのが）

（私であつたら）

（良かったのに）

10*僕の想いが君を壊す(前書き)

お題先なし。 狂愛？

10* 僕の想いが君を壊す

——僕は狂っている。
そんなこと知ってる。

君を愛したときから……いや、生まれた時から僕は狂っているんだ。

親に疎まれ、世界に疎まれ、『愛』を知らなかった僕に『愛』を植
え付けたのは君。

「ねえ、僕が『死ぬ』って言ったら君は死んでくれるのかな？」

「……えっ？」

「……冗談だよ」

君の心も身体も、僕だけの為に存在すればいい。

君が囚われの哀れな蝶ならば、僕は蝶を捕らえて離さない卑しい蜘蛛。
君を危機に落としめる事しか出来ない不完全な一匹の蜘蛛。

僕のこの想いが君を地獄に引きずり込むことになるかと分かっていて
も、君を離すことが出来ないんだ。

「……貴方が私に『死ぬ』というのなら、私は迷いもなく死を選ぶ
わ」

「……僕が誰かを『殺せ』と言ったら？」

「その人を殺すでしょうね」

僕は狂ってる。

でも、彼女も狂ってる。

いや、僕が狂わせたんだ。

普通の男と普通に恋をして、普通に家庭を築き、普通の幸せな人生を送るはずだった君。

僕が君に出会って、君を愛したことによって、君の『普通』は消え去った。

だって僕は『普通』とはかけ離れている存在だから。

「君は狂ってるね」

「あら？貴方と同じよ？」

「……そうだね。でも僕と一緒にいたら、天国からのお迎えは絶対じゃないよ？」

「それでもいいわ。貴方が地獄に行くのなら、私はただ着いていくだけ」

「君はやっぱり狂ってるよ」

「今の私にとって最高の褒め言葉だわ」

君は笑う。狂った笑みで。

僕は君を狂わせる。

僕は君を破滅へと導く。

僕は君の——身も心も粉々に破壊する。

僕の想いが君を壊す

（いつかこの手で）

（君を殺してしまうかもしれないよ？）

（貴方の手で死ねるなら）

（本望だわ）

11*お値段いくら？（前書き）

お題先なし。 彼はお金持ちで格好良く、女はより取り見取り…という裏設定があったりします。

11＊お値段いくら？

この世には沢山の『商品』が溢れかえっている。

食料、雑貨、サービス、情報……

人間でさえも『商品』として扱える。

「……ねえ、あたしに値段付けるとしたらいくら？」

「はあ？突然何言っちゃってんの！？」

「あたし、いくらだったら買ってくれる？」

「何ソレ。遠回しなプロポーズだったりする？」

「違うし。……もうっ、真面目に質問してんだから真面目に答えてよっ」

俺の彼女は所謂電波少女というやつだ。

突然変なことを言いだす。

彼女は今日も又訳の分からない質問をして、『真面目に答えて』と膨れてる。

……いや、可愛いんだけどね。

たまに、何で俺はこんな少女を隣に置いているんだと思う。

こんな電波少女じゃなくても、他に女なんて腐る程いるのに。

それでも、彼女を隣に置いておくのは、俺が彼女の傍に居たいからに他ならない。

……こんな奴でも、やっぱり好きなんだ。

「ちよつと！聞いているのっ！？」

「はいはい。ちゃんと聞いているってば」

「ならちゃんと答えてよ！」

「……あのな……ホントお前、馬鹿？」

お前の値段だなんて馬鹿なこと聞くんじゃないよ。
お前に値段なんか付けられる訳ないだろ。
お前はたった一人。お前しかないんだから。

「なっ！？馬鹿って何よ、馬鹿って！」

「……ふ」

「何笑ってんのよ！……真面目に聞いたのに」

「……お前の全てが手に入るなら、破産してもいいよ」

「……えっ？」

金なんていらぬ。借金塗れになっても構わぬ。
彼女が手に入るのなら、全てを捨てても構わぬ。

「……いや、金がないとお前を幸せにしてやれないな……」
「何か言った？」

「……結婚しようか、って言ったんだ」

「……っ、！？」

顔を赤く染めた彼女を見て、俺は『幸せ』を感じたんだ。

お値段いくら？

（お前をきつと）

（幸せにしてやるから）

（いつまでも）

（隣で笑っていて）

12＊あの時伝えておけば良かった（前書き）

お題先『確かに恋だった』
するよ『彼視点。』

『この想いを封印』

12*あの時伝えておけば良かった

「私ね、小さい頃から貴方のこと好きだったんだ」

そう言われて頭が真っ白になる俺。

今までだったら飛び上がるほど嬉しくて仕方がなくなる愛の言葉。

だけど今はその言葉が辛い。

ついさっき彼女は俺に言ったのだ。『告白されたんだけど、返事どうしようかと迷ってる』。つまり、この過去形の愛の言葉は決別の意志。そう捉えて良いんだろ…？

物心もつかない程昔から彼女のことが好きで、いつも傍に居た。

告白する勇氣なんて勿論なくて、ただ一方的に見守り続けてた。彼女はいつも俺の隣にいて、いつも特別な笑顔を俺にだけ向けてくれていた。

でもそれは『幼なじみ』として俺を見ているからだと思っていたのに。

告白するチャンスなんていくらでもあった。

今までの関係が壊れることを恐れて、告白出来なかったビビりな俺。いつももう一步が踏み出せなかった。

きつといつまでも勇氣を出さない俺に神様は呆れてしまったんだ。

しかも、最後のチャンスとばかりに機会を与えてくれたことにも気付かなかった。

これが最後で最高のチャンス。

ここで『俺も好き』って言えば何か変わっていたかもしれないのに。

それなのに俺は…

「……そうだったんだ。サンキューな」

そんなことしか言えなくて。

彼女の頭を撫でながら、本当に言いたいののはこんなことじゃないだなんて自分勝手に思ってた。

悪いのは、言いたいことも満足に伝えられなかった自分。

「……今までありがとう。ずっと寄り掛かっちゃってたけど、もう大丈夫だから」

彼女は巢立つヒナ。

俺を置いて飛び立つ小さな鳥。

いつまでも俺に寄り掛かってくれてていいのに。

一言も言えなかったこの時の自分に腹が立つ。

これは、罰なんだ。

神様が俺に与えた罰。

『幼なじみ』という立場に甘えて、彼女への気持ちから逃げて、勝手に自己嫌悪なんかしてた俺への罰。

「……たまには一緒に帰るか。どうだ？」

「あつ、今日用事あるんだよね……」

「アイツと……か？」

「……うん、〵〵君と」

君の口から俺以外の男の名前なんか聞きたくない。

君の隣は俺の特等席だったはずなのに。両想いだったはずなのに。

「そうか。アイツならきつとお前を幸せにしてくれるだろうさ」
「……うん」

彼女が去っていく。

彼女の後ろ姿を見つめていたら涙が一筋頬を伝っていた。

後日アイツがふられたことを知った。

今更後悔してるんだ。

何でこの時、君に想いを伝えられなかったんだろうって。

徐々に大人に近づくお前にもうあの時の面影なんか殆んどない。
もう手が届かない。

この時、想いを伝えられていたら何か変わっていたのだろうか？
違う二人の未来が待っていたのかな？

もう後悔しても遅いけど、俺の心にはまだ君が大きな存在として居
座り続けてるよ。

あの時

伝えておけば良かった

（いつか）

（俺以外の男の隣にいる君にも）

（微笑むことが）
（出来たら良いな）

13*貴女にこの命と忠誠を。(前書き)

お題先なし。

(元不良?) 騎士とお姫様。

13*貴女にこの命と忠誠を。

「ロザルハーレス＝メルシア、その命をこの国に捧げよ」
「はっ」

片膝をつき頭を垂れ、この国の王に忠誠を誓う一人の男。

それが俺、ロザルハーレス＝メルシア。愛称は『ロザルハ』。大抵そう呼ばれている。

俺は今日から王宮騎士となる。

国と王族の為に仕え、それを守るためなら自分の命さえ顧みない、それが王宮騎士。

騎士の中でも突飛した才能を持つ者が沢山いる王宮騎士団は、騎士の憧れ。毎年、難しい王宮騎士試験を受ける者が後を絶たないらしい。

だが、王宮騎士になれる者はほんの一握り。何万にものぼる人間が受けても、一人も受からない年だってある。

そんな超難関の試験を突破するには血の滲むような努力が必要だった。

それでも俺が、王宮騎士を目指したのには理由があって……

「ロザルハ、これからよろしく頼む。俺は隊長のカインだ。好きに呼んでくれて構わない」

「よろしくお願い致します」

「そんなに畏まらなくても良いぞ?……そうだ、お前が護る主を紹介しなければな」

「はい」

「そうそう、お前、自分で主を決めさせてくれと王に頼み込んだんだって？」

王宮騎士は王族、又はその親族の一人に専属として仕える。

その仕える相手を騎士自身が決めることなど出来ない。

だが俺はどうしても…。

王は俺の要望を聞き入れてくれた。

あの方に仕えることが出来ないなら俺が王宮騎士になる意味がない。あの方以外が主ならば王宮騎士になどならない、そう言ったからだ。

「……それが何か？」

「……いや、そんな奴は今まで居なかったから不思議だったただけだ。それにお前の選んだ主は…殆んど表に出ることはない御方。つまり、お前も王宮騎士として表で華々しく暮らすことは出来ないんだぞ？」
「そんなことは百も承知。それに華々しく暮らすことなど、望んではありません」

「では何が望みだ？」

「“深窓の姫君” アリーシア」ステレス様をこの手で護ること」

アリーシア…それは誰よりも美しい愛しい姫君の名前。

この汚れた手でも彼女を護ることが出来るのなら…。

悪意の視線に晒されながら生きてきた俺にとって、彼女は俺の光、希望、女神。

彼女を前にしたら必ずこう言って、この身を捧げよう。

『私、ロザルハース＝メルシアはアリーシア＝ステレス様、貴女様だけに心からの忠誠とこの命を——』

貴女に

この命と忠誠を。

（ロザルハ、）

（お前にとって姫様は…）

（誰よりも護るべき人、です）

14*この心がこんなにも騒ぐのは、（前書き）

お題先なし。

『貴女にこの命と忠誠を。』 彼女視点。

前半ロザス（ロザルハ）とアリーシアの出会い。

14*この心がこんなにも騒ぐのは、

「おい、お前大丈夫かよ？」

『族』に襲われていた私にかけられたのは呆れを多大に含んだ聞いたことがない男の声だった。

黒い髪と瞳。

そんな色を持つ人なんて見たことなくて思わず瞠目してしまう。つい自分の置かれた状況も忘れて男に見惚れていた。

「――い！おい！！」

「……あ、えと……な、何でしょうか……？」

「ったく。こんな夜中に外に出てたら、襲ってくれて言ってるもんだろーが」

「……、」

「今回は俺が追い払ってやったけどよ、それも今回限りだぜ？」

その言葉に周りを見回すと、何人もいた『族』が一人も居なくなっていた。

この人が追い払ってくれたのか……。

「あの……お礼を……」

「ん？お礼？んなのいらねーよ。今回は俺の気紛れだし。

それにどっちかってーと俺も『族』側の人間でね。感謝される程良い奴じゃない」

「『族』側の人間……？貴方はこんなにも優しいのに……」

私がついそう漏らすと、男は苦笑して言う。

「気のせいだろ」

そう言う男の瞳には微かに哀しみの色が浮かんでいて。
何故だか凄く胸を締め付けられた。

「お名前を教えて頂けませんか？私、貴方の名前が知りたい」

せめて名前だけでも。

貴方ともう会うことは出来ないだろうから…貴方のことを知れるチャンスは今しかないから。

貴方が自分のことを聞かれないタイプだって分かったけど、やっぱり何か貴方と繋がるものが欲しい。どうしてそう思うかなんて分からない。今は知らなくても良い、そう思うから。

「……変な嬢ちゃんだな」

そう言つて笑う男が何だか眩しくて。

あたしが何でこんなにこの男に惹かれたのか、この時は全然分からなかったけど。

後から、この男の自由さに憧れていたんだと気付いた。

「変、ね。そうかもしれない。私は籠の中の鳥。世界を知らない無知な鳥」

「……？」

男は怪訝そうな顔をした。

その目は何が不満なのかと静かに問い掛けていた。

私の事情を知るわけがないのに、何故私はこの時口を滑らせてしま

ったのだろっ。

この男なら理解してくれるとでも思ったのか…。

私は一国の隠された王女。

名前すら殆んど知れ渡っていない第一王女。

存在だけは国民にも知れ渡っているが、姿も見せず、その存在も嘘ではないかと言われ続けている王の娘。

王宮という籠の中に押し込まれ自由のない希薄な娘。

それが“深窓の姫君”である私。

私達は何だか似ている気がするの。

「私はアリーシア。貴方のお名前は？」

「……ロザス。それで良い」

そう言って背中を向けて去っていくロザスの姿に胸が痛んだ。

……もう会えない。

そう思っていたのに。

「私、ロザルハーレス」メルシアはアリーシア「ステレス様、貴女様だけに心からの忠誠とこの命を——…」

片膝を着き頭をたれる、騎士の絶対的な忠誠を示す形。

「……ロザ、ス…？」

畏まった礼と言葉遣いではあったが、その姿と声は紛れもなく、もう一度会いたいと願っていたロザス。

ロザルハーレスと名乗った男は、優しく私に向かって微笑むだけ。それは暗に肯定を示していて、泣きそうに、なった。

……ああ、私はこの人にいつの間にか心を奪われていた…。

「——ロザスっ、！」

片膝を着いているロザスに飛び込むと、ロザスは一瞬目を丸くしたが、すぐに優しく笑って受けとめてくれた。

この心が
こんなにも騒ぐのは、

（貴女を忘れたことなどなかった…っ！）

（俺もだよ）

（……これからは私の傍にいてくれる？）

（当然）

15*貴女は遠い日の記憶、そのまま。(前書き)

お題先なし。
彼視点。

『この心がこんなにも騒ぐのは、』
続編。

15*貴女は遠い日の記憶、そのまま。

ぴしつと頭を下げて礼をするカイン隊長の隣で片膝を着き頭をたれ、忠誠を誓った俺に向けられたのは、驚愕に彩られた一点の曇りもない大きな黒い瞳。

「……ロザ、ス……？」

ああ、貴女は俺のことをまだ覚えていてくれたのか。
俺と貴女が出会ったのはもう随分も前のことであるのに。

——嬉しい。その感情が沸き上がるのと同時に俺の固く結んだはずの口元が弛んでいた。

「——ロザスっ、！」

俺の名前を紡ぎながら俺へと飛び込んでくる彼女。

愛しくて愛しくてしょうがない。

俺はつい、隣にいるカイン隊長のことまで忘れて飛び込んでくる彼女を受けとめていた。

彼女だけが紡ぐ『ロザス』という愛称。

普段の『ロザルハ』とは違う、彼女だけの俺の名前。

「ロザス…貴方…どうして……」

「本日付けで貴女様をお護りする王宮騎士となりました」

貴女がこの国の王女だと知った時、王宮騎士という道を迷いもなく選んでいた。

貴女をこの手で護りたかったから。貴女だけはこの手で護りたいか

ら。

一人の主に対して王宮騎士も基本は一人。

貴女を護る奴が未だいないと聞いてどれだけ嬉しかった事か。でも同時に怒りで身体が震えた。この儂くも美しい彼女を誰も護ろうとしていなかったことに。

今まではそれでも何とか安全に暮らせていたかもしれない。だが、これからそうだとは限らないのに。

俺は、彼女を護る枠を誰にも渡さぬように、彼女を早く危険から遠ざけたいがために、必死になって王宮騎士を目指した。

それでも随分と時間が掛かってしまったが。季節が一周もしてしまっ
う程大変だとは知らなかった。

それでも、諦める気はさらさらなかったが。

「……っ、ロザルハ！無礼だぞっ！！今すぐ離れるんだっ！」

カイン隊長が叫んで、俺ははっとして彼女を優しく引き離れた。

「……申し訳ありませんでした、アリーシア様」

「っ、いえ。取り乱してしまっただけが悪かったですから……」

「挨拶はそれくらいにしよう、ロザルハ。まだやらないかいけないことが沢山あるんだ」

「はい」

「……では姫様。失礼させていただきます」

「え、ええ」

「では、後程、アリーシア様」

俺はそれだけ言うと既に歩き出していたカイン隊長の背に向かって颯爽と歩き出した。

ちらと振り返ると、彼女は目に涙を溜めてこちらを見つめていた。

……ああ、泣かせてしまったのは俺ですね。
大丈夫です、直ぐに貴女の元に戻りますよ——
…

貴女は遠い日の記憶、
そのままです。

(……変わってないですね)
(貴方は変わった)
(貴女の傍にいますためです)

16*この気持ちに名前をつけるとするならば…（前書き）

お題先なし。

『貴女は遠い日の記憶、そのままです。』 続

編。隊長視点。

暫くこのシリーズ続きます。

16*この気持ちに名前をつけるとするならば…

俺は今最高にイライラしている。

「……カイン隊長、私がやるべきこととは？」

原因はコイツ。

俺の半歩後ろを歩きながら俺に話し掛けるこの男。

ロザルハーレス＝メルシア。本日付けで王宮騎士に就任した男。

ロザルハという男はそれはそれはおかしい男だった。

今まで騎士であったというわけでもなく、名を馳せていたわけでもないのに、俺と互角以上にやり合うことが出来、また今までどこで何をしていた人物がすら分かっていない。

……ロザルハという男の情報が全くないのだ。

そんな怪しい男を剣の腕だけで、王宮騎士にすることなど俺は反対だった。事実、俺は最後まで反対していた。

王にしつこく『“深窓の姫君”付けにして欲しい』と頼み込んだのも理由の一つ。

自分の護る主人を自分で決めることなど許されてはいないというのに。

だから、この男はきつと姫様に取り入ろうとする愚か者が、姫様を亡き者にしようとする暗殺者。

この男を信用してはいけない。

……そう思っていたのに、現実には上手く行かなくて。

この男は王から王宮騎士として姫様を護るように、と言い渡された。姫様を護りたい。姫様でなければ王宮騎士などならない。という熱

い想いに王の心が動かされたいらしい。

“深窓の姫君”アリーシア・ステレス様は、公の場に殆ど出ることはなさらない美しくも儚い少女だ。

王宮騎士など華々しい生活を送るために目指す職種。

そんな王宮騎士は誰であつてもあの少女に近づくことなど許されない。

欲に塗れた人間なんて、彼女の目に入れてはならない。

初めて逢った時、眩しい笑顔を見せてくださったあの方を前に、俺は自分の心が汚れ切っていたことに気付いてしまった。

それでも、笑顔を見せてくださった彼女にはこの世に溢れかえる負の感情など見せてはならないと一人心に誓った。

その誓いを違えまいと思い続け、影ながら彼女を見守り続けてきたというのに。

《……ロザ、ス？》

まだ新しい記憶から凜とした彼女の声が聞こえた。

《——ロザスっ、！》

まるで愛しい人の名を紡ぐように噛み締めて声を出す彼女。

『ロザス』とは誰だ、という疑問が頭を過る前に、衝撃的な映像が視界を狭めた。

……どうして…。

彼女はあろうことか、あの危険な男、ロザルハに抱きついていてた。

……そして、抱きつかれたあの男は口元を緩めるのを隠そうともしせず、彼女を抱き締め返す。

それはどう見ても、久しぶりに逢った恋人達の姿で。

その光景に茫然としている俺は無意識に自分の唇を噛んでいた。

唇から血が滲み、鉄の味が口に淡く広がったことで、やっと正気を取り戻す俺。

胸の痛みと共に沸き上がった黒い感情。

それに気付きたくなくて、気付かれたくなくて、叫んで二人を離れさせていた。

「……カイン隊長？」

声がかけてはつとずる。

意識が記憶に取り込まれていたらしい。

「……お前は姫様とどういう関係なのだ？」

「関係という程のものでもないですよ？一度逢ったことがあるだけですから」

余裕綽々とした感じで話すこの男が憎いと思った。心底苛ついた。

……やはり、俺には光は似合わない。

俺の心はやはり簡単に黒に染まってしまう。

気付きたくなかったこの黒く醜い感情の名前は――…

この気持ちに
名前をつけると
するならば…

（嫉妬。）

（俺ってこんなに醜かったんだな…）

（……カイン隊長？）

（今は話し掛けるな）

17*どうして私だけ？（前書き）

お題先なし。
編。彼女視点。

『貴女は遠い日の記憶、そのまま。』 続

17* どうして私だけ？

「ねえ、ロザス？」

「……何だ」

ロザスが私を護る王宮騎士となって早数か月。

私と二人っきりの時だけは、出会った時の口調で話してくれている。それが自分だけの特権みたいで何だか嬉しかった。

「ロザスって、みんなには『ロザルハ』って呼ばれてるよね？」

「あーそうだな」

「じゃあ何で、私には『ロザス』って名乗ったの？昔から貴方の愛称は『ロザルハ』だったんでしょう？なら、あの時だってそっちで名乗れば良かったのに」

ずっと気になっていたのだ。

「『ロザルハ』は昔の自分。その名前は俺の黒歴史の象徴…だから」
「じゃあ、何で皆には『ロザス』って名乗らなかったの？その名前が過去を思い出す憎いモノなら、捨ててしまえば良かったのに」

そう言うのと、ロザスは困ったように笑う。

そして、『新しい名前を呼ぶのはお前だけで良い』と遠回しに私の提案を蹴っていた。

どうして、と私が首を傾げると、『俺の過去を知っているのはお前だけだろう？だからだ』と理解出来るのか出来ないのかよく分からない持論を展開された。

そつえば、一度私仕えの侍女から話を聞いたことがあった。

《ロザルハース様を一度『ロザス』様とすっかり呼んでしまったことがあるのです。姫様がいつもそう呼んでいますので…移ってしまっただんだと思います》

それで？と促すと、その侍女は些か固くなったような笑顔で言った。

《……私が『ロザス』様と呼んだ後、どうなったと思いますか？》

《……どうなったの？》

《その場が凍り付きました》

《……へ？》

《殺気を含んだ眼差しでこちらを見られたので、皆一様に怯えてしまいました。それはもう…この世が滅ぼされてしまうという馬鹿な考えが頭を掠めてしまう程でしたので》

その侍女が言うには、その場にいた何人かの王宮騎士でさえも、その迫力に圧倒され、何も出来なかったらしい。

彼女は怯えながらも、何とか伝えるべきことだけは、伝えなければいけないと姫…つまり私が呼んでいたことを告げた。

すると、ロザスの瞳から一瞬にして殺気が消え、表情も柔らかくなったという。

そして『その名は彼女だけのものです。貴女が軽々しく呼んで良い名ではありません』とだけ言葉にし、その場から立ち去った…。

そんな、お話。

《あんな風になるロザルハース様は初めて見ました》

過去をちよつとただけだけど知っている私としては別に驚くことでもない。

それよりも…

《……私、だけ…？》

《姫様は本当にロザルハース様に好かれておいでなのですね。ロザルハース様はその名を姫様以外には呼ばせたくはないのでしょう。逆を言えば、ロザルハース様は姫様だけにはその名で呼んでほしいと思っいていらっしゃるのですよ》

そう言つて微笑む侍女に私は何故だか顔が赤く染まつていくのを止めることは出来なかつた。

「……私以外の人は『ロザス』って呼んじゃいけないの？」

「……ああ」

「どうして？別に貴方の過去を知らなくてもいいじゃない。今、貴方はここにゐるのに」

「……その名はお前だけのものだからだ」

「……意味分らないよ」

「分からないなら良い。……それより、天氣が良いし、城の中にいてもどうせ退屈なんだろう？どこかに出掛けるか？」

「え？いいのっ！？」

「俺が護衛として付いていけば、問題ない」

「街！街に行きたいっ！」

私がそう言つてはしゃぐと、私の大好きな笑顔で彼が笑つてた。

今日も王宮は優しい雰囲気に包まれて穏やかに時間が過ぎていく――それは変わらないことであり、変わってほしくないこともあるのだ。

どうして私だけ？

（このネックレス綺麗っ！）

（勝手あげますよ）

（えっ！ホントっ！？）

（ええ。貴方にならいくらでも）

18*素直にはなれない(前書き)

お題先なし。クリスマス。

18*素直にはなれない

——ホワイトクリスマス。

それは恋人達の聖なる日。

そんな聖なる夜に、私達も街の中心にあるビッグクリスマスツリーを見に来ていた。

「……綺麗だな」

「……まあ、こんなもんじゃないの？」

「お前なあ…今日位素直になったら？」

私は可愛くない。

可愛いことなんて言えない。

本当は、ツリーすごく綺麗だと思ってる。でも君に聞かれるとつい…

「お前、ツリー見たかったんだろ？なら、ちょっとくらい素直になつて『見れて嬉しい』とか言えば良いのに」

「……別に見たかったなんて言つてない」

ああ、私はホントに可愛くない。

明日か明後日か一年後かは分からないけど、いつかきっと、愛想をつかれて大好きな君にも嫌われちゃう…。

「……お前、何泣きそうになってんの？」

「泣きそうになんかなってない…」

何だかすごく不安になった。

だから、彼の冷たくなった手を自分から握った。

……離れていけないで、と。

「何？俺と手エ繋ぎたかったの？」

「ちっ、違う！寒いからっ！」

「ふーん…まあ、そういうことにしといてあげてもいいけど？」

「ほ、本当だもん！」

「……そんな顔赤くしてたら説得力ないって」

「寒いからだよっ」

恥ずかしくなって、手を離そうとしたのに、離れなくて。

彼が私の手をさっきの私以上に強く握ってくる。

「何、手エ離そうとしてんの？」

「……っ、は、離してよっ！」

「ヤダ」

私がどんなに手を振り回しても、振りほどくことは出来なくて。

「別にいいじゃん。だってお前、寒いんだろ？それに俺、まだお前と手エ繋いでいたいし」

「……っ、！？」

「……好きだよ」

顔が赤くなる中、私はたまには素直になってみようと口を開いた。

素直にはなれない

(……私も、好き)

(…っ！)

(なっ、何、アンタが顔赤くしてんのよっ)

(っ…だって…可愛すぎ…)

(ばっ、ばかっ…！)

19＊初恋は実らない、ジंकクスさえも憎い（前書き）

お題先『確かに恋だった』

19＊初恋は実らない、ジंकスさえも憎い

俺が君と出会ったのは偶然だったのか、必然だったのか。たまたま近くにいたのが俺だっただけ。俺がムカついたから、しめただけ。

それだけだったのに…

「あつ、あの、昨日はありがとうございました…っ」

翌日、俺の前にやってきて頭を下げたのは、昨日痴漢から助けた女。

それから俺達は毎日のように話すようになった。

約束なんてしていないのに、それが当然のことのように近くにいた。そんな日々は俺にとって楽しくて、手放したくないものになった。

彼女に対する想いは最初とは全然別の形へと変化していった。

彼女への想いが膨らんでいく。

気付けば俺はとっくに彼女に”恋”してた。

——俺の、初恋。

そんな自分に気付いてはいたけれど。

気付きたくない自分がいたのもまた事実。

だって最初から知ってた。

いつも目を逸らしていたけど、ずっと苦しかった。胸が痛かった。

——彼女の左手の薬指、そこに埋まって光っている、指輪。

出会った時には既にしていたその指輪は、俺と彼女の間に壁を作っていた。

踏み込んではいけない。踏み込むな、と。

忠告にも似た、警告。

『初恋は実らない』

だなんて誰が決めたんだろう。

そんなジンクスさえなかったら、俺にだってチャンスくらいあったかもしれないのに。

俺の最初で最後の初恋の相手は——

最初から俺のことなど見てくれない、そんな人でした。

初恋は実らない、

ジンクスさえも憎い

（そんなの八つ当たりだって）

（分かっているけど）

20*せめて隣が、あなたじゃなければ(前書き)

お題先『確かに恋だった』

双子の妹。実は愛されているのにそれに気付けない哀れな子。

20*せめて隣が、あなたじゃなければ

あたしは双子の片割れ。

妹の”日影”。姉は”日向”。

どうなのこの差、っていつも思ってた。

——そう、今も。

「それでね、あの人結構可愛くてー」

「はいはい、ベタボレだね。惚気なくていいから、ひなた」

「ひかげってば。惚気てなんかないわよ」

あたしと違って明るくて素直で可愛い姉。

顔は同じなのに、姉は本当に”ひなた”って感じで。

羨ましくて、憎たらくて。

姉の彼氏はあたしの好きな人。

せめて自分と同じ顔の姉を選んでくれなかったら。

あたしもきっぱりと諦められたのに。

同じ顔なのに。おんなじ顔であるはずなのに。

同じ顔だからこそ、あの人があたしではなく、姉を選んだことが悔しくて、辛くて。

「ひかげはどうなの？」

「どうなのって？」

「……彼氏と」

「……ああ、」

——上手くいつてるよ。

だなんて。

好きでもない人と付き合って。

きっと、あたしの彼氏だって本当は”ひなた”の方が好きで。

あたしのことなんて誰も見てくれてないんだ。

どうしてあたしは”ひなた”の影にしか成り得ないのだろう。

せめて隣が、

あなたじゃなければ

（あたしだって）

（”ひなた”の方になりたかった）

21＊確かなことは、彼が私を見ていないという現実（前書き）

お題先『確かに恋だった』

双子の姉。好きな人も自分の彼氏も妹が好きという不幸な子。

21＊確かなことは、彼が私を見ていないという現実

私は”日影”になりたかった。”日向”なんかいらなかった。
私が”ひかげ”なら。

そうだったら、貴方に愛されたのに。
そうだったら、貴方は私を見てくれたのに。

「ひかげー！」

妹を呼ぶ愛しい貴方の声。

私の好きな人は双子の妹”ひかげ”の彼氏。

「何ー？」

「明日暇？デートしようか」

「んー…明日あした…ねえ。うん、確か暇だったかな」

ああ、憎い。

何もしなくても傍にいられる妹が。

どうやっても”ひかげ”にはなれない自分が。

どうして私は”ひなた”なんだろう。

どうして私は”ひかげ”じゃなかったんだろう。

どうして、どうして。

「”ひなた”？どうした？」

この人は私の彼氏。
でもちゃんと知ってる。

貴方も”ひかげ”が好きなんでしょう？
でも貴方は優しいから。
あたしの傍にいてくれるのよね。

私は”ひかげ”の代わり。

でも決して”ひかげ”にはなれない。

ただ同じ顔をした、それしか価値のない、偽物。がらくた。

同じ顔なのに、全然違う。

”ひかげ”であるはずの妹は人に愛されて。

”ひなた”であるはずの私は”ひかげ”の予備。

「どうしたんだよ、”ひなた”」

貴方はいつか”ひかげ”の代わりじゃなく”ひなた”として見てくれますか？

ああ、貴方の優しさに溺れてしまう。

——でも。

確かなことは、

彼が私を見ていないという現実

（私は今までも）

（そしてこれからも）

（
” ひか^げ
” の代わり
）

22* 残念ながらへた惚れ（前書き）

お題先 『確かに恋だった』

22*残念ながらベタ惚れ

「パン買ってきて」

「はいはいただいまー!」

財布だけ持って購買へ走る。そして彼女の為にパンを買う。勿論俺の奢りで。

——それが俺の日常。

「お前さー、あの子にあんな態度とられてム力つかねえの?」

「そうそう。あいつお前のことなんだと思ってんのかね」

彼氏を召使のように使うなんて。

こうやって遠回しに『あの子と別れる』と言われるのも俺の日常。でも俺は別れる気なんてさらさら無いんだけどね。

だって……

「さっき何の話してたの?」

「ん?君が死ぬ程可愛いねっていう話」

「っ、!ば、バカな話してんじゃないわよっ!」

そう言つて、赤くなって照れやすい君を知っているから。

俺に冷たく接するのは、ただ照れてるだけだってちゃんと知ってるから。

「いつまで待たせるつもり?」

「え?あ、ごめんごめん」

彼女の言いたいことは自分で察する。
それが俺のポリシー。

俺は彼女の右手の指と自分の左手の指を絡ませて、キツく握り締めた。

彼女が手をブラブラさせているのは『手を握って』という合図。
彼女が俺の顔をじーっと見つめるのは『キスして』という合図。
彼女が俺の服の袖をそっと握るのは『抱き締めて』という合図。

最初の頃は全然気付けなかった俺だけど、今では誰よりも君を知ってる。

これは誇示じゃない。きっと、君よりも君のこと知ってるよ。

君は照れ屋だから言葉に出来ないんだよね。

ちゃんと知ってる。

ちゃんと知ってるから。

誰よりも俺に君自身を見せて。君のこと全て知りたいから。

「今日は俺んち来る?」

ぎゅっと繋いだ手を握られた。

『Yes』の合図。

「サンドイッチ。早く買ってきて」

「了解しました、俺のお姫様」

「……何言ってるの。早く行きなさい」

これが俺の日常。

頬が微かに赤くなってるよ、俺の愛しい愛しい彼女様。

残念ながらベタ惚れ

(君以上に君のこと)

(知っていたんだ)

23* 残念ながらへた惚れ2 (前書き)

お題先『確かに恋だった』

：同じお題で書いてしまったと気付いたときには既に書き終わっていた：というアホな話。めんどくさいから同じタイトルのままで。

23*残念ながらベタ惚れ2

俺は教師失格だと時々思う。

だって俺は……君に、生徒に恋をしてるんだから。しかも、ただの純粋な恋じゃない。愛してるんだ。自分の手で壊してしまいたい程に。

「先生――！」

「ん？何だよ？」

「何だよ？じゃないよっ！今日は何の日だと思ってるの！？」

「え？何の日？」

なんて言いつつも実はちゃんと覚えてるけど。

ちよつと意地悪したくてからかってみる。

君の顔を覗き込むと……君の瞳は涙で揺れていた。

ああ、泣かせてしまった。

泣かせたくはなかったのだけれど。

「……先生のバカっっ！」

君は涙目で怒って、俺に背を向けてこの場からいなくなろうとする。そんな走り去ろうとしていた君の腕を少々乱暴に俺は掴んだ。

俺から逃げようだなんて許さない。

……たとえ、どんな理由があつたとしても。
俺の前からいなくなるなんて許せない。

「っ、離して、よ！…記念日を忘れる先生なんか…嫌いっ！」

『嫌い』、か。

君のその言葉がどれだけ俺の胸に突き刺さるか、君は知らないから平気でその言葉を口に出来るんだ。

俺が君のこと『愛してる』って知らないのか？

俺が君のこと、生徒だってちゃんと分かっててリスクも理解してるのに、それでもお前と一緒にいたいんだって知らないのかよ？

それとも、ちゃんと全部分かってるくせにわざと言ってる？

……あー、もっと大人の余裕見せろって感じ。

余裕なんてねえじゃん、俺。カツコ悪。

「……あのさ、俺が本当に忘れてると思ってるわけ？」

「……え、？」

涙をいっぱい溜めた目で俺を見つめる君に甘い甘いキスをした。

残念ながらベタ惚れ

（付き合って今日で一年、だろ？）

（……っ！）

（忘れるわけないだろうが。ほら）

（これ……）

（指輪。俺のモンだって印）

24＊きみ攻略マニュアル（前書き）

お題先『確かに恋だった』

24*きみ攻略マニュアル

本当にきみは手強い。

いつもそう思う。

きみは未だに俺を無視する。

きみは未だに俺の存在を否定する。

きみは未だに俺の気持ちを信じてはくれない。

「俺達さ、いつ付き合えんの？」

「……一生そんな未来は来ないよ」

「冷たー！ いいじゃん、付き合おうぜ？ 彼氏いないんだろ？」

「……………」

「無視すんなって！」

まるで何もなかったかのように俺の傍を通り抜けようとするきみ。

ああ、いつこの想いはきみに届くのだろうか。

きみが俺のことをどう思っているかさえ、分からない。

良いようには見られていないんだろ？ とな、とは態度で分かってしま
うのだけれど。

きみの考えていることが知りたい。

きみの全てを知りたい。

——きみを知りたい。

きみの攻略マニュアルがどこかに売っていたら良いのに。

ゲームみたいにマニュアルを読めば、きみの心に触れられるかもしれない。

そんな馬鹿の事が頭に過る。

俺にとって『恋』なんて初めてのことで。

女の扱いなんて慣れているはずなのに、きみには全然通用しなくて他の女と同じ扱いなんてしたくなくて。

「早くきみが俺のものになれば良いのに……」

「貴方は何でそんなにあたしにこだわるの？ 貴方なら、あたしじやなくても他にもっと可愛い子が沢山向こうから寄ってくるでしょう？」

「きみじゃなきゃ意味が無いんだよ。きみが良いんだ」

「……そうやっていつまであたしのことからかい続けるつもり？」

からかつてなんかいないのに。

きみこそいつまで俺の本気に気付かないままにいるつもりなんだよ？

——早く、気付け。

きみ攻略マニュアル

（きみの心が）

（早く俺に向けば良いのに。）

（誰よりも）

（幸せにしてやるのに。）

25*きつと夢中にさせるから(前書き)

お題先『確かに恋だった』

25*きつと夢中にさせるから

——君に夢中、だなんてそんなことあるわけない。

そう思っているのに、君に確実に惹かれていつてる俺。
この想い、どうやったら止められる？

どうやったら君に惹かれていく俺を止められる？

そんなことを自問自答する日々。

……情けねえ。自分でもそう思うけど。

——でも、早く。

早くこの想いを消滅させなければ。元々そんなものはなかったかの
ように更地に戻さなければ。

君が俺のこの狂おしい想いに気付いてしまつ、その前に。

「ちょっとおー！私の電子辞書返してよっ」

「別に梨奈使わないじゃん。電子辞書なんて」

「英語の単語分かんなくて宿題出来ないの！」

「ふーん。俺が教えてやろうか？」

……どうか、俺の浅ましい気持ちになんて気付かないで。

君は俺の醜い欲望で汚れてしまわないで。

そう思うのに。そう思っているのに。

心の何処かで、俺の手で君を染めてしまいたいだなんて思っている
俺がいる。

そんな俺に気付いて欲しくなんか勿論無くて、俺は醜い部分を必死

になって押し込み続けている。

——もう何年になるだろうか。

君に夢中だなんてそんなモンじゃない。

君に嫌われたら、きつと生きていけない。

君の隣を取られたら、発狂する。

君がいなくなったら、世界を憎んで、君のいない世界なんてそんなのいないから、俺は世界を壊す。

それ程までに君に溺れて、依存しているんだ。

他人に無関心なんて言われてる俺だけど、本当はそうじゃない。

梨奈、きみ以外なんて必要じゃないだけ。

興味も好意も感情も行動も。

俺の全ては君だけに。

「俺、英語得意だし？」

「何処の世界に弟に勉強教えてもらう姉がいるのよ」

「此処」

きつと夢中にさせるから

（君も同じように）

（俺に狂ってしまえば良いのに）

26*この距離、絶妙（前書き）

多分、お題先なし。

26*この距離、絶妙

これはきつと”恋”なんだろう。

「早く、来いよ？」

「……うん」

「待ってるから」

そう言うてはにかむ彼は多分わたしの好きな人。

三つ年上の彼は所謂近所のお兄さんというやつで、昔から可愛がってくれてる。優しくて格好良くて、面倒見も良い。

今日はそんな彼とお買い物。

「お待たせ」

「ん？今日は早いな」

「そう？」

「ああ。偉い偉い」

なでなでとわたしの頭を撫で回す大きな手。

いつまでも子供扱い。でも、この手が好きだからいつも黙ってされるがままになっている。

「お前ってホントちっせーよな」

「ちょっっ！」

人が気にしていることを！
そう思ったのに。

「まあ、頭撫でやすいし、これでいいんじゃない？」

だなんて。

わたしが怒れないとっしていて言うんだから質が悪い。

三つ年上の彼が考えてることなんて分かるはずもない。

覗きたいとは思わないけど、少しでも教えてくれたらいいなと思う。
これ以上近づきたいだなんて、そんな我が儘言いはしないけど。
この距離が遠くなるのは嫌だと思っってしまう。

このままでいい。

このまま傍にいれば良い。

この一歩離れた距離が崩れたら。

きっとわたし達はわたし達でいれなくなるから。

「なあ」

「何？」

「俺がお前のこと好きだっていったらどうする？」

「は？」

そんなあり得ないこと言わないで。

そう言ったら、ぼそっと『本気なんだけどなー』なんて聞こえてきた……気がする。

でもわたしはそれを聞いていなかったことにした。

きつと近づいても、わたし達は変わってしまう。

君が好き。

多分、君が好き。

言わない…いや言えないだろうけど。

きつと君が好き。

でも、近付けない。

近づいちゃいけない。

どんなに辛くても、

どんなに嘘で塗り固めても構わない。

わたしの隣には一歩離れた君がいる。

それが変わらなければ、わたし達は今日もわたし達でいられるんだ。

この距離、絶妙

（きつとあなたには）

（理解出来ないだろうけど）

27*If it wasn't raining, we could go

お題先なし。辞書から適当に引つ張つた第一段「C」。意味『もし雨じゃなければ、出かけられたのに』

何でこう外に出たい時って雨なんだろう。

「外出したいー!」

「仕方ねえだろ。雨だぞ、雨」

「せっかくのお休みなのに…」

「お前はいつも休みだろ」

「学校行ってるし!って違うっ!休みてのは私のじゃなくて…」

「ああ、俺のか」

「そうだよ!いつもいっつも仕事ばかり」

有休も殆ど取ろうとしない本当に仕事ばかりの男。

いつか過労で倒れちゃうんじゃないかっていつも思う。

……彼にとってはその心配すら煩わしいものであると分かっているけれど。

彼女である私もほったらかしにして仕事を優先させるこの男は、本当は私なんか邪魔なだけで必要ないんだろう。

……なんて思う日も少なくない。

でもやっぱり好きだから、自分から離れるなんてこと出来ないの。

邪魔するしか出来なのだから、いっそ、拒絶してくれば良いのに。

「……家の中、つまんない…」

「はあ?」

「……やっぱり出掛けよ」

「雨だっつーの」

「車あるじゃん」

「俺に運転させる気?」

「うん」

たまには我が儘だって言いたくもなる。
いつも構ってもらえないから。

だから、久しぶりのゆつくり出来る時間、有効に使いたい。
それに……いつまでも我が儘は言えないって知ってるから。
この関係が終わるまでならいいでしょ？

我が儘の一つや二つ、可愛いお願いだって叶えてみせてよ、ねえ。

それとも、自分から離れられない私のことなんか構うことも……嫌？

「……たく」

「キス、して」

「は？」

「キス。キスしてよ」

何も言わず私にキスしてくる貴方から、いつかは離れなくちゃ。
それが遠い未来じゃないことも理解してるよ。

キスなんて本当はいらない。

それより……もっと私のこと構ってよ。

If it wasn't raining,
we could go out.

（私のこと突き放すまでは）

（傍に、いて）

28*君は君であつて君じゃない(前書き)

お題先なし。詰め込みすぎて理解不能。

28*君は君であって君じゃない

今でも後悔してるんだ。

あの時、君を引きとめておけば、こんな結果にはならなかったって。そう今でも。何年もたった今でもそう、思う。

俺が、あの馬鹿すぎた子供の俺が悪かったんだ。

君に罪はないって分かっているのに、どうしても君を突き放したくなるのはどうしてだろう？

「おにーちゃん？どうかしたの？」

「……………っ、いや。なんでもない」

——妹。

そう、この子は紛れもなく血の繋がった真正正銘の妹なのだ。妹以外の何物でもない。何物でもない…はずなのに。

過去が。

幸せすぎた夢のような一瞬の過去が俺をいつまでも縛り付けてる。

>>”光輝”…っ！<<

>>何だよ、”莉瑠”<<

>>えへっ、何でもないけど<<

”光輝”、”莉瑠”。

俺達の特別な名前…だった。

「おにーちゃん”…？」

”莉瑠加”、具合は大丈夫か？」

「うんっ」

今までと変わらない妹の笑顔。
変わったのは、妹自身か。それとも俺か。

でも、確実に言えることは。

”莉瑠加”は”莉瑠加”でしかなく”莉瑠”ではないということ。

”莉瑠加”は俺の妹で。

”莉瑠”は俺の彼女で……世界で一番愛しい人。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「何だ？」

「私ってどうして二年前からの記憶がなくなってるの？」

俺はその質問に固まった。

俺しか知らない、妹の記憶障害の原因。

それは——俺。

「……俺のせい、なんだ」

「おにーちゃんのこと？」

「……ああ」

俺があの時、”莉瑠”にちゃんと伝えとけばよかったんだ。

世間体なんて気にせず、君の手を引いて駆け落ちでも何でもして、
君に俺の想いを素直に言えばよかった。

”誰よりも愛してる”って。

「……”莉瑠”……」

「……り、る……？おにーちゃん？」

「何でもない。何でもないんだ」

君は君であって君じゃない

（俺が愛してた彼女はもう何処にもいない）

（そんな現実を受け入れがたいんだ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2090i/>

恋愛短編集

2010年10月11日01時00分発行